論文題目：大阪の笑いと事態把握

作者姓名：岡　智之

性別：男

学歴：大阪外国語大学大学院言語社会研究科言語社会専攻博士後期課程修了。博士（言語文化学）

現職：東京学芸大学留学生センター教授

専攻、研究テーマ：日本語学、認知言語学、対照言語学。存在表現、アスペクト、格助詞、場の言語学

連絡先住所：184-8501　東京都小金井市貫井北町４－１－１　東京学芸大学留学生センター内　岡智之研究室

電話番号：０４２－３２９－７２３５

e-mail: okatom@u-gakugei.ac.jp

大阪の笑いと事態把握

岡　智之（東京学芸大学）

１．はじめに―本発表の目的

　本稿は、「中日の笑いをめぐる対照研究」の一環として、中国語話者と日本語話者だけではなく、日本語話者の中でも、大阪人と他の地方では笑いのスタンスが違うということを明らかにしたいと思う。問題提起としては、今までの中日の笑いに関する対照研究では、日本語話者＝主観的把握で、臨場的体験的、「没入的」「身体性」の笑いであり、中国語話者＝客観的把握で、当事者離れをした笑いをするという分析（梁2009、劉2018）があるが、果たしてそのような図式が当てはまるのか、大阪人の笑いのスタンスを事態把握と結びつけて考えてみたい。

２．先行研究を利用した調査

　梁（2009）、劉（2018）で出された笑い話について、大阪人１～４[[1]](#footnote-1)がどのように反応するか調べてみた。最初の日本語話者、中国語話者の反応は、先行研究のものである。先行研究の日本語話者と違う大阪人の反応には下線を引いている。

〇笑い話A：「ズボンの話」　「女房とズボンどっちが大切だと思う？」「そりゃ、ズボンさ。女房なしでも表を歩けるが、ズボンなしでは表を歩けない。」

　日本語話者：頭にさまざまな映像が浮かび、おもしろく感じ、笑い出した。

　中国語話者：おもしろくない。何も頭にうかばない。

　大阪人１：おもしろくない。女房に残酷な発想がついていけない。／２：面白くない。女房とズボンの大事さを比較する意味がわからない。３：笑える。けど話しが年配向き。４：面白い。思わず笑ってしまいました。単純にアホらしくて、おかしい。

〇笑い話B:「81階建てのマンション」エレベーターの運転中止のため、８１階まで歩かなければならない男たちが、悲しい話をすれば、気がまぎれると言って、７９階まで来た。最後の男が、「一番悲しい話を知っている」「実はさ、僕、部屋の鍵を忘れたんだ」

日本語話者：話を聞いて、疲れたという答えや、「怒っちゃった」という答えも少なくない。

中国語話者：大笑いだった。

大阪人１：話の「オチ」がおもしろい。２：大笑いした。自分がこの人だったらと思うとこんな失敗をしたら泣きながら笑うしかない。３：笑える。 けど笑い話のオチがわかってしまった。４：笑えるが、さっきの方が面白い。理由は、部屋の鍵を忘れるなんて、悲しくて力が抜けるので。

〇笑い話C　「二重まぶた」：奥さんが二重まぶたの手術をして帰ってきた。手術に反対していた夫は思わず、「それは二重どころか、『おへそ』じゃない？」

　日本語話者：語られた内容が、しっかり＜見え＞て、逆に落ちの内容に納得できず、笑えなかった。

　中国語話者：オチがとても面白いと思う。

大阪人１：おもしろくない。二重をおへそに喩えるのは、グロテスク。２：全く面白くない。ひどい医者だ。３：笑えない。意味がイマイチ分からない。３：笑えない。医者もずいぶんといい加減だ。

〇笑い話D　「公衆電話」：下宿のおばあちゃんが、玄関に公衆電話をおいた。下宿の若者は、次々とコインを入れてかけようとしたがかからない。おばあちゃんに「この電話おかしいよ」ときくと、おばあちゃんは「それはかからないわよ。だって、それ、貯金箱だもん。」

　日本語話者：自分も「語り」の場にいて、登場人物と同じ体験をしているため、更に面白く感じる。

　中国語話者：笑わない人もいたが、笑った人は「舞台の下で見ていた」と答えた。

大阪人１：オチが面白い。２：くすっという程度。若い人たちを騙してるしっかり者のおばあちゃんがちょっと面白い。３：.笑えるが、やはり年配向きの笑い。４：笑えるが、公衆電話と思い込んでるので、貯金箱と言われて、気が抜けた。

〇笑い話E:「ウサギの話」：ある日ウサギがパン屋に行き、「メロンパン100個ありますか？」と店員に聞いた。店員は「あ、すみません、そんなにたくさんはありません…」と答えた。ウサギは「そうですか」と言い、がっかりして店を出た。次の日もウサギは同じことを聞き、メロンパンが100個なかったので、がっかりして店を出た。また次の日、ウサギがパン屋に行き、店員に同じことを聞くと、店員は嬉しそうに「あります。あります。今日はメロンパン100個ありますよ！」と答えた。ウサギはお金を出しながら、「じゃ、メロンパン2つ下さい」と言った。

日本語話者：笑えない。店員の立場に立つと怒る。

中国語話者：笑える。傍観者的立場に立つとおもしろい。

大阪人１：大阪人ならそこで「おい、２つかい！」と突っ込んで笑う。２：まあまあです。店員さんをぬか喜びさせてぬけぬけと「メロンパン2個ください。」という兎がちょっと面白い。３：よくあるパターンだが単純にわらえる。４：笑える。そうなんじゃないかと思った。

〇笑い話F「牛を盗んだ男の話」　ある男が懺悔をしに教会へ行った。

「神父様、私は他人の牛を盗みました。どうすればいいですか？神父様がこの牛を受け取ってくれませんか？」

神父：「私はいりません。飼い主の方に戻せばいいです。」

男：「しかし彼はいらないと言いました。」

神父：「では、自分で貰ってください。」

そして、その夜神父が家に戻ると、自分の牛が盗まれたことに気づいた。

日本語話者：笑えない。神父の立場に立ち、神父をだますのはひどいと思う。

中国語話者：笑えた。

大阪人１：単純に、話として落ちが面白い。２：あまり面白くない。神父さんが気の毒になる。３：.笑える。よく考えられてる。４：笑えない。ちょっとブラック。

結果からの考察：

・大阪人の笑いは、日本語話者一般の傾向とは違う場合がある。もちろん、事態臨場し、相手の立場に立つということが多いが、それで逆に笑うという場合もある。また、純粋話の筋やオチに笑うということもある。日本語話者だから、自己投入する、中国語話者だから、傍観者的にとらえるとは思わない。少なくとも、日本語話者の中でも、関東の人と関西の人の笑いは違いがあるのではないか。それは、事態把握の問題ともつながるのではないか。

３．大阪人の笑いと事態把握

・そもそも笑いというのは対象化するということから生じる（井上2003）

「笑いは、物事を、ひいては自分自身をも笑いの対象として取り上げ、相対化し、複眼的な見方を可能にします。自分離れを起こして、本来の自分を取り戻すということになります。」

・関西人は、少なくとも関東の人よりは、より共同的に会話を進め、臨場的体験的にコミュニケーションを進める傾向がある。

状況1：相手が何かしょうもないことを言ったり、失敗したりした時、相手に、手で鉄砲の形を作って、「ばん、ば～ん」と撃つかっこうをする。関西人なら、相手はかならずうたれて「わ～」と言って倒れたり、そういうリアクションをする

状況２：横断歩道で赤信号の間に道路のこちら側にいる信号待ちの人が急にピッチャーの投球モーションの身振りを始めたら、道路の向こう側で同じく信号待ちしている人が、どう反応するか実験したところ、自然に座り込んでキャッチャーの構えをとった。（尾上1999）

・大阪人は、当事者離れの笑いをする。

「大阪人は自分の失敗を笑う場合、自分がミスをした当事者であることをわきへ置いて、相手と共に第三者の位置に飛び上がってこの事態全体を見渡すという形で、いわば、当事者離れ、状況の外に立つ第三者として事態のおかしさを味わおうとする。つまり、会話の中の、当事者としてモノを言う部分と、当事者であることを離れてモノを言う部分とを厳然と区別して、その二つをヒョイヒョイと渡り歩くのが大阪人の会話だ（尾上1999：１７５）。

４．結論

・日本語話者は主観的、中国語話者は客観的というような図式は、大阪人には当てはまらない。

・大阪人は、日本語話者として、事態に臨場したり、没入したり、身体性があるというのは共通している。

・大阪人は、つっこみなどにより、当事者離れの笑いをする。（中国語話者と共通）

・事態に臨場するのと、当事者離れするのとを自在に行きかって笑うのが大阪人の笑いの特徴である。

・話自体やオチの面白さを笑うのは、中国語話者、大阪人の特徴かもしれないが、個人差はある。

　今後、大阪人の笑いをいろいろなパターンでより多く調査する必要がある。

参考文献

井上宏（2003）『大阪の文化と笑い』関西大学出版会

尾上圭介（1999）『大阪ことば学』創元社

梁爽（2009）「＜事態把握＞と「語り」をめぐる日中両国語話者の相違―「笑い」を中心に―」『認知言語学会論文集第9巻』pp584-587.

劉元昌（2018）『笑いの社会的意味に関する日中対照―＜事態把握＞の観点より―』創価大学文学部卒業論文

1. 大阪人は、大阪出身の筆者本人と関西在住の本人の兄姉3人を対象とした。 [↑](#footnote-ref-1)